



URL <http://www.pippo.co.jp>
Email pippo@diana.dti.ne.jp

ピッポ新聞

2003

9

No. 179

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

復刊と重版2冊の絵本

そこから無理矢理飛躍して

『はせがわくんきらいや』 (長谷川集平・作 1680円 ブッキング)

この『はせがわくんきらいや』は1976年、すばる書房からでていた「月刊絵本」の第3回創作えほん新人賞を受賞した絵本でした。当時、ある種の衝撃を持って絵本の世界に迎え入れられた絵本です。それは、何の飾りもなく、子どもの視点からストレートに子どもの世界を描いたものであったからではないでしょうか。

子どもに対して、如何に大人がきれい事として人間世界を糊塗しても、子どもたちは本当のことをお見通しなのです。若い(その当時)長谷川集平は、こんなのもありなんだぜ! と、子どもの本の世界に提起したのです。



さて、この『はせがわくんきらいや』が登場して、30年近い年月が経とうとしているというのに、子どもの本の世界は、いまだに見せかけのきれいなことや、まやかしが何と

多いことでしょうか。そんな絵本の多くが、推薦図書や課題図書になっ

ているところも、旧態依然たる子どもの本の世界なのです。見せかけの愛だ、癒しだなどということは、大概にしてみたいものです。

はたして、きれいな事ばかりを描く絵本や児童文学が、子どもの力になっていくのでしょうか?

渋谷に遊びに出て事件に巻き込まれる小学生の女の子や、殺人の手助けをしてしまう中学生が存在するこの時代に、子どもの本は子どものために何を描いているのですか?

金儲けのために、渋谷という街を作ったのは大人であることや、渋谷へ子どもを誘い込むために今も努力(?)している大人を放置しておいて、子どもの問題を語ってよいのでしょうか。

これは、突き詰めていけば、小泉政権の政策のたまためさまでいきつくことなただけで、この件は別の機会にいたします。(横道に逸れてすみません)

なにはともあれ、この絵本の復刊を歓迎したい。

この絵本は復刊ドットコムの高得票人気作品ということで、復刊されたそうです。

『みずまき』 (木葉井悦子・作 1890円 講談社)

こちらは、重版です。

さて、この絵本の作者木葉井悦子さんも、子どもに媚びようなどは、爪のかけらほども考えていなかった絵本作家です。

木葉井さんの絵本のテーマは「いのち」の賛歌、といったものではないでしょうか。それも、この地球上の生き物の最上位は人間だ、などとい

う考えでなく、生きとし生けるものすべてへの共感なのであり、すべての生き物に対しての慈しみなのだと思います。

夏の暑い昼の庭で、女の子がホースで散水している。その水の先々には「虫けら」がいて、それぞれの生を謳歌している。水撒きしている女の子がそれを、自分の喜びとして感じ取っている、というのがこの絵本の内容なのだと思えます。



生きることや、生き物ってのは、きれいな面ばかりではないのです。そのう、魚を例にとれば、「切り身」の部分だけ見ていてはダメなのです。その過程で出る内臓を自分で掴み出してこそ「魚」を知ることになるのだと思います。

その上で、自分以外の「いのち」を感じ、これを賛歌しているのが、木葉井悦子さんの絵本の世界ではないでしょうか。

ぼくは、この絵本の女の子が庭に水をまきながら感じているであろう喜びに思いを馳せながら、豊かさということについて考えないではいられませんでした。

「いのち」といえば、先に紹介した、長谷川集平の別の絵本に『とんぼとりの日々』(1977年すばる書房刊・絶版その後、温羅書房からリメイクされ「とんぼとり」として復刊された

が「こちらも今は絶版」というのがありますが、これは、田舎から都会へ越してきた子が、都会の子がトンボを捕まえることができないのを見て、捕まえてみせるのです。その後、捕まえたトンボを都会の子が逃がそうとするのです。これを見た田舎の子が「お前らバカか」と怒る場面があるのですが、この絵本は、木葉井さんとは違った面で「いのち」を考えさせられる絵本だと思います。

というのも、ぼくはこの絵本から一つのことを連想するのです。よく幼稚園などの保育室で昆虫を飼っているのを目にするのですが、ぼくはあれはとても残酷なことだと感じるのです。

まず、昆虫(虫けら)などというものは、野原に生きていたのであって、保育室などに囲って飼うものではないのです。(個人が好きで飼うというとは別)

飼うということは、ペットとして飼うことなのです。野生の生き物をペットとして飼うなどは残酷なことなのではないでしょうか。それも公の場(保育室)でやってしまう感性がぼくには理解できません。

でも、もっと大事なことは「とんぼとりの」の田舎の少年のように、捕まえたトンボは羽をむしろうが、虫かごに入れて飼おうが捕まえた人の自由なのです。トンボなどはいじり回してすぐ死ぬか、翌日死ぬかの違いはあっても必ず死んでしまうのです。死ねば新しいトンボを捕まえればよいです。

ぼくの子どもだった時はそうしていました。虫かごに、蝉を何十匹も捕らえたもの

でした。大部分は翌日には死んでしまうのです。そうして、またあらたに蝉を捕りました。夏休みはその繰り返しで毎日でした。きつと、一夏に百匹以上の蝉を殺したことでしよう。勿論蝉だけでは有りません。トンボ・チョウ・甲虫類・それに雑魚・・・

ぼくは子ども時代にあらゆる殺生をしてきました。当時、ぼくが特別残酷な少年だったわけではないと思います。仲間がみな同じことをしていましたから。

こういう過程を経て、子どもは「いのち」ということを認識していくのではないのでしょうか。

ぼくは、幼稚園の先生がやっていることは、「とんぼとりの日々」に出てくる都会の子どものように、中途半端なことをしているのだと思うのです。

簡単に飼って、育ててしまうということからは、「いのち」に対する感性がそだつのでしょうか？

まさか、木葉井さんの絵本のような「いのち」を賛歌する心が育つなどとは思っていませんよね。中途半端は何事につけよくないんだよね。

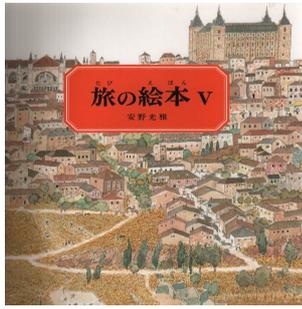
こう書いてきたからと言って、何もぼくは昆虫を殺すことを奨励しているワケではありませんから、誤解のないように！

またまた大きく横道に逸れてしまいました。さて、我々おとなは子どもたちに子ども本を通して、魚の内臓を掴み出すことが必要で有ることを伝えなければならぬのではないのでしょうか。

今から思えば、物が溢れるどころか、不足していた時代、夏の暑い日、草いきれの中で、庭に水をまく心豊かな記憶が甦ってくるのです。現実の生活の中では、庭に水撒きをするなどということの出きる暮らしの人が、果たして何人いるのでしょうか。この物溢れ、国民自身がとても豊かだと思いいこんでいるこの国が、本当に豊かなのだろうか？という思いに駆られたりするのです。豊かさって何さ？
合わせて、『カボチャありがとう』（1890円 架空社）も是非！

ねーこの本読んだ？

『旅の絵本V』（安野光雅・作 1365円 福音館書店）
安野光雅の『旅の絵本V』が出版された。



『旅の絵本』が出版されたのが1983年だから、実そうだから、実に20年振りの同シリーズの新作である。最初の『旅の絵本』が出たのが1977年で、ここから1983年の『旅の絵本』までは6年だから、これにくらべると、それから20年はあまりにも長い。こいうのは、再び作者に描く意欲がわいてくるものなのか、版元に書かさ

れるのかはわからないが、ともあれ、人気シリーズの復活を喜びたい。

さて、今回はスペイン編とあるから、スペインにちなんだ事柄が、絵本の中にちりばめられている。有名な建物や画家たちの絵なども散見できる。それにね、「一寸法師がお椀の舟に乗って川を下っている」何て場面を、おじさんは見つけたのだけだね。

この「旅の絵本」について詳しく知りたければ、「母の友」10月号に安野さん自身が詳しくかたっているの、こちらをお読み下さい。

特報！5冊だけ、安野さんのサイン入り本が有りますから、ご希望の方はどうぞ。先着順

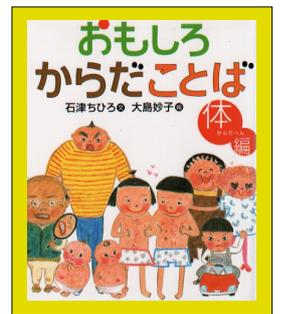
『あんぼんたんの おもしろことば』（ひろかわさえこ・作 1365円 草土文化）
その一とあるから、この本は「その二」もあるのです。両方とも、ちよつとかわつた言葉や、普段何気なく使っている言葉の意味などを、いっ



ごころ、どんな風

にできたのかを説明した本です。たとえば「あんぼんたん」「とんちんかん」「ちんぷん かんぷん」なんて言葉の語源がなんなのかなど。

類書で『おもしろ からだことば 体編』
『おもしろ から



「胸がさわく」・・・など。

『海賊日誌 少年ジェイク、帆船に乗る』（リチャード・プラット・文 クリス・リデル・絵 長友恵子・訳 2520円 岩波書店）



この本は、十八世紀当時のカリブ海沿岸で起こった海賊事件など当時の時代背景を折り込みながら、十歳の少年ジェイクが見習い船員として乗り合わせた帆船での出来事を、航海日誌風に綴った冒険物語です。

ジェイクの乗って帆船が、海賊船に襲われ、舟ごと乗っ取られてしまった。ジェイクを以下の乗組員は海賊の一員になったのである。この絵本当時の時代的背景や、風俗（船員たちの）や人びとのもの考え方などが分かって、おもしろい。

高学年向き的大型絵本

だことば 頭編
（石津ちひろ・文 大島妙子・絵 1365円）も、同じ草土文化から

『ブリットーマリはただいま幸せ』（アストリド・リンドグレン・文 石井登志子・訳 徳間書店）



「長くつ下のピッピ」「やかまし村の子どもたち」の作者リンドグレンのこの作品が最初の作品なのだそうです。十五歳の少女ブリトーマリが、ペ

ンフレンドへ向けて自分の家族のこと、恋の悩みなどを手紙という形で、書きつづけて物語は進行していきます。読み勧めていくうちに、家族の個性や家族に於ける役割や、位置付けなどが自然に入っているからすごい。主人公を通して、人間の生きる喜びが伝わってくる作品です。

中学生の女の子にお薦め

『三つの冠の物語』（ローズマリー・サトクリフ・文 山本史郎・訳 1890円 原書房）

ヒース、樫（オーク）、オリーブの冠にちなんだ、3つのものがたりから成っています。

中の「野生のオリーブの栄冠」は4年ごとに開かれるオリンピック競技（古代の）に出場するため出かけた主人公のアテネの少年と、スパルタの少年がともだちになる「

とから始まるが、相手が競技直前に怪我を



したことにより、フェアな競技ができないことを悩む主人公との友情のものがたりだが、この物語集はいずれ

も、人は神々とともに生きていた、それぞれケルト、ローマ、ギリシアの時代の若者の友情を描いたものである。

中学生男の子にお薦め

インフォメーション

*「ばあやのおはなしかご」今月は9月27日（土）午後2時からピッポにて開催を予定しています。どなたもお出でください。

*「タンタンの冒険旅行」の18巻が刊行されます。

『金のはさみのカニ』（エルジェ・作 川口恵子・訳 1680円 福音館書店）

タンタンシリーズの待望の新刊です。さて今回の冒険はタンタンの愛犬スノーウィが見つけたカニの秘密を追って、タンタンと船長の冒険のはじまりです・・・。

9月24日発売予定 予約受付中！
* 2004年カレンダー
「ピーターラビット」カレンダー卓上（縦十三×横

二十二センチ）定価893円（税込み）

「旅の絵本」カレンダー（縦三十九×横二十八・五センチ定価1400円（税込み）以上2点発行・福音館書店 入荷済み

来月には多くを紹介できると思いますから、おたのしみに

編集後記

先日ソウルのユニバーシアード大会に於ける北朝鮮の女性真入り横断幕で見た、彼女たちの行為にはビックリしてしまった。「將軍さま」の写真を風雨にさらすのは不敬であるということらしかった。彼女たちの見せた行為は、ぼくには恐ろしくばかばかしいことだし、とうてい理解できるものではない。しかし、この行為をぼくには、笑うことができなかった。なぜなら、先の戦争までは、これと全く同じことを、我々の父母たちはやっていた（やらされていた）のであるからだ。全国の学校には奉安殿があり、そこには天皇の写真が納められていて、そこを通るときは必ず最敬礼を強要されたという。笑えないのは、これに近いことが、現在でも学校の卒業式などで行われているからである。今や卒業式などで国旗を掲揚することは義務化されている。校長などは先ずこの国旗にお辞儀をしてから、しゃべりだすのである。ばかばかしい！ぼくは危惧するのである。もしかすると、奉安殿復活まで後ちよっとの時間しかないのかも知れない。だから、小泉や石原が支持されている限りは、笑いたいにもかかわらず、ぼくには北朝鮮の女性応援団を笑うことができないのである。